令和３（２０２１）年度　御船町立高木小学校　学校便り

高き志【こころざし】

目指す学校像
地域とともにある
勢いのある学校

No．16（R3．9．6発行）文責 校長 福田雅也

多様性の時代

今年の夏の大きなイベントと言えば、やはり「東京オリンピック」でした。そして、昨日までパラリンピックも開催されていました。そのパラリンピックの開会式で、オープニングビデオの後にテレビ画面に大きく映し出されたのは、タレントのはるな愛さんでした。思ってもいなかったので少し驚きましたが、すぐに彼女（彼）が抜擢された意図を感じることができました。きっと「多様性を認め合うことの大切さ」の象 徴だったのではないかと思ったのです。はるな愛さんについて、改めてここで触れる必要はないと思いますが、明るいキャラクターとは裏腹に、ご自身が生まれ持った性質により、これまで様々な苦しい経験をしてきたであろうことは容易に想像できます。開会式後、愛さんのインスタグラムには次のような文章が綴られていました。「パラリンピック開会式　本当に素敵なショーに参加させていただきました！！誰も違って誰もいい。本当に変わる時です。。パラリンピック選手のみなさんを一緒に応援しましょう！！」

オリンピックを見ていると、それぞれの競技の中で、技術や速さ、力を極限で競い合い、頂点を目指す姿に大きな感動を憶えます。しかし、パラリンピックを見ていると、みんなが頂点を目指し、競い合う姿に感動するだけでなく、それぞれの選手が様々な障がいを乗り越え、その種目と向き合う中で自己実現を目指し、それが生きがいになっていることが強く伝わってきます。多様な方々の存在とその方々の多様な生き方について、その人の存在を通してたくさん学ぶことができる機会となっていました。出 場しているすべての選手を応援したくなったのは私だけではないでしょう。

その中でも、やはり熊本県出身選手の応援には力が入ります。競泳男子視覚障害クラスで銀メダル２個、銅メダル１個を獲得した富田宇宙選手はその一人でした。彼の公式サイトのトップページには次のような文章が載っています。「宇宙飛行士を目指していた高校生の頃、失明に至る難病が発覚しました。徐々に視力を失っていきましたが、様々な経験を経て、今は障がいを持ったおかげでたくさんのことを学ばせていただいたと感じています。感謝は心を豊かにし、多様性はイノベーションを生みます。こんな時代だからこそ、それをみなさんに伝えていきたい。パラアスリートとして、いかなる状 況であってもチャレンジを続け、それを発信することで社会に価値を創出します。みなさんと一緒に、一日一生、全身全霊で進んでいきます。」…見えていた世界が見えなくなるという絶望感や不安感は想像を絶するものだろうと思います。そんな経験を乗り越え、このような思いで頑張ってきたのだと思うと、心に響く文章です。

また、昨日行われた視覚障がい者クラスの女子マラソンでは道下美里選手が見事金メダルに輝きました。道下選手が銀メダルを獲得したリオ・パラリンピックで、ガイドランナーを務めた堀内選手の講話を聞いたことで、勝手に親近感を憶え応援していたので悲願の金メダル獲得をとても嬉しく思いました。（以前発行した関連の学校便りを裏面に掲載します）そのマラソンで、道下選手の金メダルの喜びを超えるくらい驚いたことがありました。それは、同じ競技に出 場していたあと二人の選手の年齢を聞いた時です。なんと、藤井由美子選手が５６歳、西島美保子選手が６６歳だったのです。視覚に障がいがありながら、前向きにブラインドマラソンに挑戦し、その年齢でパラリンピック出 場まで達成するとは本当に驚きです。しかも、二人とも3時間30分以内での完走です。長距離を少しでも経験したことがある方なら、マラソンを3時間30分以内で走ることの凄さは分かっていただけると思います。

正に、多様な方々の存在とその方々の多様な生き方について、二人の存在を通してしっかりと心に刻むことができました。

コロナウイルス感染拡大を受け、パラリンピックにおける「学校連携観戦プログラム」について批判的な意見が多く聞かれました。もちろん、感染拡大を防いだり、子どもたちを感染から守ったりするためには当然だと思います。しかし、これから「多様性の時代」を生きていく子どもたちにパラリンピックを直接観戦させてやりたかった、と思うのは私だけでしょうか。